広島県姥ケ原国有林におけるクロマツ

幼齢林施肥試験

〔関西地方における林地施肥試験(第3報)〕

河	田		弘山
衣	笠	忠	百(2)

1. は じ め に

関西地方の瀬戸内海沿岸部には、せき悪林地ないしせき悪林移行林地が広く分布している。これらの林 地は天然生のアカマツ林によって占められている場合が多いが、その成長は土壌条件が不良なために、全 般的にかなり低い。最近はこれらのアカマツ林を伐採したあとに、アカマツないしクロマツの人工植栽が 行なわれている場合が多い。このような造林地では、一般に幼齢木の成長は不良であるが、前生樹の成長 経過から見て、植栽木の今後の良好な成長を期待することは、一般に困難であるように思われる。

筆者らはこれらの林地に対する成長促進の一つの方法として,施肥の効果について検討することにした。さらに,前報45/46)と同様に葉分析による林木の栄養診断についての基礎的な資料を,マツ類についてうるために,針葉の養分濃度と成長との関係,およびこれらにおよぼす施肥の影響等についての検討もあわせて行なうことにした。

このような目的のために、筆者らは広島県西条営林署管内のクロマツ幼齢林を用いて、1964年秋から施 肥試験を行なってきたが、すでに3か年を経過した。この試験地は今後もなお長期にわたって継続の予定 であるが、いままでの結果を中間報告としてとりまとめることにした。

2. 試験地および試験方法

2-1. 試験地

位 置……広島県加茂郡大和町,西条営林署姥ケ原国有林1,026に林小班。

気 候……年平均気温 15.3°C,年平均降水量 1,350 mm,温暖で雨の少ない地域に属する⁵²⁾。

地 況……この試験地は瀬戸内海沿岸の三原市の西北約 12 km に位置する。海抜高は 250 m で, いわゆる里山地帯にあり, 方位 S25°E。傾斜 20~22°。山脚の比較的短い丘陵性山地の中腹〜斜面上部にかけて,各プロットを水平方向に併設した。この試験地の前生樹は天然生のアカマツ林であったが, 伐根から推定するとその成長は不良であったと考えられる。

2-2. 試験方法

この試験地は設定当時2年生のクロマツ人工林であった。これらのクロマツは1963年春に西条営林署

1968年8月5日受理

⁽¹⁾ 関西支場育林部土壤研究室長•農学博士

⁽²⁾ 関西支場育林部土壤研究室

林業試験場研究報告 第 219 号

イラスケ苗畑で養苗された 1-1 苗を植栽したもので、植栽密度は 3,000 本/ha であった。

1964年12月初旬に2ブロック,4プロットの試験地を設定し,施肥区(プロットAおよびA')および無施肥区(プロットBおよびB')とした。

施肥は3年間連続して行ない,各年度いずれも住友森林化成1号(N 15%, P₂O₅ 8%, K₂O 8%, 粒 状)を1本あたり100gずつ,クローネの周辺に深さ5cmに円状に行なった。施肥時期は初年度は12月 初旬,第2および第3年度は10月下旬であった。

保育は下刈りを年1回夏に行なった。

2-3. 測

成長量の測定は第4表に示した設定時およびその後の追肥時期に, 樹高および根元直径(高さ5cm)の測定を行なった。試験期間中に生じた下刈り,その他の事故木はすべて測定から除外した。

2-4. 土壌および針葉の分析方法

分析方法はすべて第2報46)と同様であった。

定

3. 土 壤

3-1. 母材料,土壤型,断面形態および植生

土壌の母材料は深層風化した黒雲母花とう岩であった。

土壌型は BA-Er 型土壌(乾性褐色森林土と受蝕土の中間型)に属していた。

土壌の断面形態は次のとおりであった。

Prof. 1 Ba-Er 型土壌(ブロック1)

L:1cm_o

 $F:2\sim 3 \, cm_{\circ}$

A-(M):2~3cm, 7.5YR4/3*, loose granular structure, 小角礫中, しょう, 乾, CL, 根系すこ ぶる多, B₁ との境界判。

B₁:20 cm, 7.5YR5/6~5/4, massive, 小角礫中, 軟~堅, 潤, CL, 根系多, B₂ との境界漸。

B₂:20 cm, 7.5YR5/6, massive, 小・中角礫中, 軟~堅, 潤, CL, 根系中, B₈ との境界漸。

B₈:25 cm+, 7.5YR5/8, massive, 小·中角礫少, 堅, 潤, CL, 根系少。

Prof. 2 BA-Er 型土壌(ブロック 2)

L:+~1cm。

 $F:1\sim 2 \text{ cm}_{\circ}$

A~(M):1~2 cm, 10YR5/2, loose granular structure, 小角礫中, しょう, 乾, CL, 根系すこぶ る多, B₁との境界明。

B₁:14 cm, 10YR4/4, massive, 小角礫中, 軟, 潤, CL, 根系多, B₂ との境界判。

B₂: 27 cm, 10YR5/6, massive, 小角礫少, 軟, 潤, CL, 根系中, B₈ との境界漸。

B₈:20cm+, 10YR5/8, massive, 中角礫少, 軟~堅, 潤, CL, 根系少。

地表植生はコシダが群状に広く地表をおおい、その他ワラビ等のシダ類、ヒサカキ、ソヨゴ、ネジキ、

* 色名は農林水産技術会議編 標準色名帳(1960)を用いた。

シャシャンボ、コナラ、イヌツゲ等の低木が見られ、乾性型の植生が主体をなしていた。

このような断面形態から明らかなように、この試験地の土壌は A 層の発達が悪く、 腐植に乏しい受触型の土壌といえよう。また、中国地方の瀬戸内海沿岸部に広く分布している、せき悪移行林地の典型的な型に属するといえるであろう。植生の面からは、橋本⁴⁰⁰の分類にしたがうと、コシダ型のせき悪林地に相当する。

3-2. 土性および土壌の理化学的性質

試験地の土壌の土性および土壌の理化学的性質は第1~3表および第1図に示すとおりであった。 両断面の各層位はいずれも埴壌土に属し、埴質であった。孔隙量は少なく、容積組成において細土の占 める割合が大きく、容積重もきわめて大きかった。

これらの諸点は,両断面の土壌はいずれも未熟で,いわゆる"つまり型の土壌"であることを示していた。したがって,この両断面の土壌の理学的性質は不良であったといえよう。

土壌の化学的性質については次のとおりであった。両断面を相互に比較すると、Prof. 1 は Prof. 2 よ りも置換性 Ca 含有率はかなり高かった。しかしながら、全般的に両断面はいずれも 置換性 Ca お よび Mg 含有率, 0.2N HCl 可溶 P₂O₅ 含有率 はかなり低いレベルーとくに B₁ 層以下 では一にあったといえ よう。これに対して、0.2N HCl 可溶 K₂O 含有率はとくに低い値ではなかった。また、腐植 (C) 含有率 は低く、C-N 率はかなり高い値を示した。

以上の諸点から見て、両断面の化学的性質はいずれも良好とはいい難かった。また、林木に対する養分

断面番号 Prof.	層位		砂 Sand		微砂	粘土	土性
No.	Horizon	粗 砂 Coarse sand	細 砂 Fine sand	計 Total	Silt	Clay	Texture
1	$\begin{array}{c} A - M \\ B_1 \\ B_2 \\ B_3 \end{array}$	33 34 38 34	21 21 21 19	54 55 59 53	27 24 24 23	19 21 17 24	CL CL CL CL
2	$\begin{vmatrix} A-M\\ B_1\\ B_2\\ B_3 \end{vmatrix}$	32 32 28 30	22 19 16 17	54 51 44 47	29 28 32 30	17 21 24 23	CL CL CL CL

第1表 生 性 Table 1. Texture of soil

第2表 土壌の自然状態の理学的性質

Table 2.	Physical	properties	of	soil	in	natural	condition
THOIC D.	I II y olcar	properties	O1	0011	***	maturar	contarcion

断面番号		深さ Depth from		性 W olation cc/min)	容積重 Volu-		osity (量 %)	Water capaci		最小容 気 量 Air	Moistur tent of soil	190
Prof. No.	Hori- zon	sur- face (cm)		15分後 After 15min.	Ave-	ht	細孔隙 Fine pore	粗孔隙 Coarse pore	計 Total	容積 Volu- me	重量 Wei- ght	mini-	Volu-	▲重量」 Wei- ght
1	$\begin{vmatrix} A-M\\ \sim B_1\\ B_2\\ B_3 \end{vmatrix}$	1~ 5 25~29 45~49	23 22 10	22 21 10	23 22 10	106 112 116	22 19 20	27 29 28	49 48 48	42 45 45	44 46 44	7 3 3	22 24 28	24 25 27
2	$\begin{vmatrix} A-M \\ \sim B_1 \\ B_2 \\ B_3 \end{vmatrix}$	1~ 5 20~24 46~40		27 29 19	28 31 19	92 106 93	16 21 24	40 33 34	56 54 58	32 45 56	38 46 63	24 9 2	16 26 34	19 26 39

林業試験場研究報告 第219号

第3表土壌の化学的性質

Table 3. Chemical properties of soil

断面 番号 Prof.	層位	深 さ Depth from	с	N	C/N	置 抱 Exchan (m.e./		0. 2NH Solu (pp	m)	収係数 P2O5	置換 酸度 Exch.	p]	H
No.	Horizon	surface (cm)	%	%		CaO	MgO	P_2O_5	K ₀ O	absorp- tion's coefficient	acidity Y ₁	H ₂ O	KCl
1	$\begin{vmatrix} \mathbf{A} - \mathbf{M} \\ \mathbf{B_1} \\ \mathbf{B_2} \\ \mathbf{B_3} \end{vmatrix}$	$1 \sim 3$ $5 \sim 15$ $25 \sim 35$ $45 \sim 55$	4.60 2.56 0.64 0.34	0.19 0.08 0.02 0.02	24.4 32.0 32.0 17.0	1.32 0.85	0.44 0.30	4 trace	133 100 111 56	630 340	7.0 5.6	5.05 5.25	4.10 4.10
2	$\begin{vmatrix} A - M \\ B_1 \\ B_2 \\ B_3 \end{vmatrix}$	$1 \sim 2$ $4 \sim 14$ $18 \sim 28$ $45 \sim 55$	4.18 1.83 1.17 0.62	0.15 0.08 0.07 0.04	27.9 22.9 16.7 15.5	0.45 0.34	0.32 0.12		109 68 90 101	610	8.1 7.4	5.00 5.00	3.95 4.05



(S:Fine soil, G:Gravel, R:Root, Wmax:Water holding capacity, Wt:Moisture content of fresh soil, Amin:Air minimum)
第1図 土壌の自然状態の理学的性質 Fig.1 Physical properties of soil in natural condition の供給の面では、N, P₂O₅, CaO-とくに P₂O₅一等の少ないことが、大きな影響をお よぼすのではないかと予想された。

4. 結果および考察

4-1. クロマツの成長におよぼす施肥 の影響

4-1-1. 成長経過

各測定時期におけるクロマツの樹高およ び根元直径,および各年度別の樹高および 直径成長は第4および5表,および第2図 に示すとおりであった。

4-1-2. クロマツに対する施肥効果

この試験地におけるクロマツの無施肥区

の成長はきわめて不良で,5年生の平均樹高は101 および113 cm に過ぎなかった。さらに,試験地設定 後の樹高成長は年々わずかずつではあったが低下を示していたことは,今後の成林に対して暗い見とおし を与えているといえよう。

クロマツに対する施肥効果は初年度から明りょうに認められた。肥効指数*の面では、初年度は樹高成 長よりも直径成長の方が肥効が大きかったが、第2~3年度は樹高成長が直径成長を上回った。

施肥区における施肥後3か年間の全成長量(平均)は無施肥区に比べると樹高成長で84 cm (168%*), 直径成長で26 mm (144%*)の増大を示し、5年生の平均樹高は188 および193 cm,平均根元直径は 56 mm および59 mm に達した。

いままでのクロマツおよびアカマツ幼齢林に対する施肥試験および肥培事例調査の結果を総括すると、 次のような諸点が認められた。

すなわち、全般的な傾向として、クロマツおよびアカマツ幼齢林に対する肥効は、スギ、ヒノキ等一と

^{*} 肥効指数(成長量,施肥区/無施肥区,%)

	立木	本 数	19644	手12月	19654	F10月	1966£	₣10月	19674	₹10月			
プロット	Nos. o	f stand	Dec.,	1964	1964 Oct., 1		965 Oct.,		Oct.,	1967			
Plot	事 故 Damaged	測 定 Measured	103 同	根元直径 Basal diameter	11型 同 Height	根元直径 Basal diameter	樹 高 Height	根元直径 Basal diameter	個 同 Height	根元直径 Basal diameter			
А	11	132	58 26~86	$\frac{13}{7\sim 18}$	$\frac{86}{51 \sim 131}$	$\frac{23}{12\sim31}$	$\frac{130}{85\sim195}$	40 19~58	188 116~262	56 33~76			
В	15	122	$\frac{58}{34\sim106}$	<u>14</u> 9~20	$\frac{81}{44\sim132}$	20 13~31	98 59~160	$\frac{26}{14 \sim 44}$	$\frac{113}{69 \sim 194}$	$\frac{37}{24 \sim 63}$			
A'	16	127	56 22~87	$\frac{14}{8\sim 23}$	$\frac{86}{37\sim144}$	$\frac{25}{11 \sim 43}$	$\frac{135}{66\sim200}$	42 16~70	193 101~276	$\frac{37}{31 \sim 85}$			
B′	12	140	$\frac{55}{31 \sim 106}$	$\frac{13}{8\sim 20}$	$\frac{76}{41 \sim 159}$	17 10~28	90 48~181	23 11~39	$\frac{101}{54 \sim 196}$	$\frac{26}{12\sim 46}$			
	肥 区 e of fertil (A and A	.')	57 (100)	14 (100)	86 (109)	24 (126)	133 (141)	41 (164)	191 (179)	58 (181)			
	● 肥 区 of unferti (B and B	ilized plots	57 (100)	14 (100)	79 (100)	19 (100)	94 (100)	25 (100)	107 (100)	32 (100)			

第4表 毎年の樹高および根元直径 Table 4. Annual height and basal diameter

備考 Remarks

樹 高:Height……cm,根元直径:Basal diameter……mm

プロットAおよびA'……施肥区: Plot A and A'……Fertilized plots.

プロットBおよび B'……無施肥区: Plot B and B'……Unfertilized plots.

カッコ内の数値は肥効指数(施肥区/無施肥区,%):

Figures in parentheses are fertilizer efficiency index (Fertilized/Unfertilized, %).

Table 5. Annual neight and basa diameter growth												
プロット	1 年 First	三度 year	2 £ 2nd	戶 度 year	3	戶 度 year	3 年間合計 Total growth during 3 years					
Plot	樹 高 Height	根元直径 Basal diameter	樹 高 Height	根元直径 Basal diameter	樹 高 Height	根元直径 Basal diameter	樹 高 Height	根元直径 Basal diameter				
Α	$\frac{28}{12\sim53}$	$\frac{10}{3\sim 18}$	<u>44</u> 19~79	$\frac{17}{4\sim 28}$	<u>58</u> 31~94	$\frac{16}{6\sim 26}$	$\frac{130}{82 \sim 197}$	43				
В	$\frac{23}{4\sim53}$	$\frac{6}{1\sim 14}$	$\frac{17}{4\sim 50}$	$\frac{-6}{1\sim 16}$	$\frac{15}{4\sim 46}$	$\frac{11}{4\sim 22}$	$\frac{55}{20\sim134}$	23 9~43				
A′	<u>30</u> 11~58	$\frac{11}{2\sim 21}$	<u>49</u> 21~78	$\frac{17}{4\sim 29}$	$\frac{58}{30\sim100}$	<u>17</u> 6~36	$\frac{137}{68 \sim 198}$	45				
Β′	$\frac{21}{4\sim53}$	$\frac{4}{1\sim 14}$	$\frac{14}{4\sim 32}$	$\frac{-6}{1\sim 17}$	$\frac{11}{3\sim40}$	$\frac{3}{1 \sim 15}$	$\frac{46}{18 \sim 111}$	$\boxed{\frac{13}{3\sim35}}$				
施肥区平均 Average of fertilized plots (A, A')	29 (132)	11 (220)	47 (313)	17 (283)	58 (446)	17 (243)	134 (268)	44 (244)				
無施肥区平均 Average of unfertilized plots (B, B')	22 (100)	5 (100)	15 (100)	6 (100)	13 (100)	7 (100)	50 (100)	18 (100)				

第5表 毎年の樹高および根元直径成長

Table 5. Annual height and basal diameter growth



くにスギーの場合に比べると、かなり劣るものと思われた。いままでに報告された結果は、試験方法(肥料の種類,量,施肥回数,土壌条件等)がそれぞれ異なるが、後述のように、肥効があらわれにくいと考えられる初年度を除いて、肥効の持続が期待される施肥後2~4年度について、各年度ごとの樹高成長量を検討すると、肥効がほとんど認められない例および筆者らが肥効を認める基準と考えた肥効指数130 に達しない例^{1)~4)6)~89)41)48)50)51)55)56)}がかなりの数に達していた。肥効指数が150~200 に達している例¹⁾⁵⁾³⁶⁾⁴⁷⁾⁵⁴⁾はきわめて少数であった。

これらのアカマツおよびクロマツの施肥試験地ないし調査例は、乾性型の褐色森林土 (BA および BB 型 土壌)、受蝕土、未熟土およびこれらの中間型に属する場合が多く、良好な成長を期待しうる Bo ないし Bo(d)型土壌等において行なわれた場合はきわめて少なかった。したがって、これらの試験地および調査 地の無施肥区における、アカマツないしクロマツの樹高と直径成長量はかなり低かった。それゆえに、施 肥にともなう成長の絶対量の増大という面では、かなりの肥効指数が認められていた場合でもわずかな量 にすぎないといえよう。

このような結果は、クロマツおよびアカマツに対する肥効は肥効指数の面でも、成長の絶対量の増大と いう面でも、わが国の他の主要造林樹種に比べると、全般的にかなり低いことを示すものといえよう。

クロマツおよびアカマツに対する肥効が低い原因について、一部の研究者⁴¹⁾⁶⁰はマツ類の根は再生成力 が弱いために、植栽時の根系の障害(切断等)、植え方の不良、施肥位置の不適切等を指摘している。し かしながら、上述の諸例中には天然生のアカマツ幼齢林に対する施肥試験も含まれているが、これらの場 合に、肥効指数が人工林に対する施肥試験と大きな相違を示していないことは、必ずしも根系が原因とは 考えがたいように思われる。

また、少数例ではあったが、土壌条件が良好で無施肥区におけるマツ類の樹高成長がきわめて良好な場合も、肥効はほとんど認められていない。この点は守屋49、芝本⁵⁸⁾および河田⁴⁴⁾がアカマツ苗について指

-126 -

広島県姥ケ原国有林におけるクロマツ幼齢林施肥試験(河田・衣笠) - 127-

摘したように,アカマツが土壌の養分状態に対して鈍感な樹種であると考えられることも,アカマツに対 する肥効が全般的に低いことの原因をなしているのではないかと思われる。クロマツについては十分な資 料がないが,アカマツとほぼ同様の性質を有するのではないかと推定される。

増⁵⁰および佐藤ら⁶⁰はアカマツについて、初年度は樹高成長より直径成長の方が肥効指数が大きく、樹高成長に対する肥効は次年度からあらわれることを明らかにした。また、中崎および西本³⁸⁾、西本³⁴⁾もクロマツに対する肥効は同様に施肥の翌年からあらわれることを指摘している。今回の筆者らのクロマツの場合も同様の傾向を示していた。これらの点は、アカマツは春〜夏にかけて、主として前年度に蓄積した 養分によって樹高成長を行ない、夏〜秋にかけて養分の蓄積と直径成長を行なうことを、増⁵⁵⁾および河田⁴⁸⁾が苗木について明らかにしたが、このような性質が原因をなしているものと思われる。また、クロマツもアカマツと同様の性質を有するためであろうと推定される。

今回の結果は3か年を経過したにすぎない。今後の追肥の方法およびその効果,肥効の持続期間等,今後の検討に待たなければならない問題が多く残されているが,現在までの結果は肥効指数の面ではきわめ て満足すべきものといえよう。また,施肥区におけるクロマツの成長は,一般に土壌条件の不良なこの地 方としては,良好なものとみてさしつかえないように思われる。

以上の結果は、この地方のせき悪林地ないしせき悪移行林地におけるクロマツの造林に対して、施肥は かなり明るい見とおしを与えつつあるといえよう。

4-2. 葉分析によるクロマツの栄養診断

4-2-1. 針葉の養分濃度

この試験地のクロマツの各調査時期における頂枝の1年生の針葉の各養分濃度(葉分析の結果)は,第 6表に示すとおりであった。

4-2-2. 同じ土壌条件下におけるクロマツの成長と針葉の養分濃度との関係

この試験地を設定した当時、各プロット内のクロマツの樹高成長にはかなりの相違が見られた。

土壌条件は各プロット内ではほぼ同一と考えられたので,各プロットごとにクロマツの成長の良否と針 葉の各養分濃度および各養分比がどのような関連性を有するかについて検討を試みた。

試験地設定当時(1964年秋)に、各プロットいずれも平均樹高に近い樹高 60 cm を基準にして、樹高 60 cm 以上および 59 cm 以下の 2 つのグループに区分して、それぞれ針葉を採取して分析を行なった。

試験地設定年度(1964年)の樹高成長は精密な測定が不可能であったが、冬芽の長さを前年度と同じと みなして、冬芽の根元からその下の枝の根元までの長さを、その年の樹高成長量と見なした。各プロット はいずれも樹高の高いグループは低いグループに比べると、樹高成長量はかなり大きかったことが推定さ れた。

各プロットごとに両グループの針葉の養分組成を比較すると、次のような結果が得られた。

針葉の N および K 濃度は ブロック 1 (プロット A および B) では樹高の高い グループの方が高かっ たが、ブロック 2 (プロット A' および B') では反対の傾向を示した。 P 濃度は各プロットいずれも樹 高の高いグループの方が高く、Ca および Mg 濃度は樹高の低いグループの方が高い場合が多かった。し

林業試験場研究報告 第 219 号

第6表 針葉の養分濃度および養分比

Table 6. Nutrient concentrations and their ratios of needles

乾物当たり%:(Per cent on dry basis)

プロット Plot	с	N	Р	К	Ca	Mg	C/N	N/P	N/K	N/Ca	K/P	Ca/Mg
1964 年 12 月 : Dec., 1964												
$\begin{array}{rrr} A & <^{a}_{b} \\ B & <^{a}_{b} \\ A' & <^{a}_{b} \\ B' & <^{a}_{b} \end{array}$	54.3 53.4 54.2 53.2 52.7 53.5 53.5 53.5	1.32 1.29 1.50 1.47 1.35 1.38 1.45 1.48	0.061 0.058 0.064 0.060 0.062 0.057 0.058 0.057	0.69 0.67 0.71 0.70 0.70 0.71 0.68 0.70	0.33 0.33 0.33 0.32 0.34 0.34	0.089 0.091 0.090 0.086 0.084 0.086 0.090 0.092	41. 1 41. 4 36. 1 36. 2 39. 0 38. 8 36. 9 37. 4		1.9 2.1 2.1 1.8 1.9 2.1	3.9 4.5 4.5 4.2 4.1 4.1	11.6 11.1 11.7 11.8 12.5 11.7	3.6 3.7 3.8 3.8 4.0 3.7
	·/			1965 年	10月:	Oct.,	1965					
A B A' B'	53.2 52.5 51.9 52.7	1.05 1.26 0.94 1.16	0.073 0.048 0.077 0.051	0.86 0.78 0.85 0.75	0.32 0.34	0.092 0.10 0.091 0.10	50.7 41.7 55.2 45.4	14.4 26.3 12.2 22.7	1.6	3.9 2.5	16.3	3.2 4.2
				1966 年	10月:	Oct.,	1967					
A B A' B'	52.3 51.6 52.3	0.90 0.88 1.04	0.050 0.079 0.052	0.71 0.76 0.71	0.33	0.089 0.10 0.10	58.1 58.6 50.3	18.0 11.1 20.0	1.2	2.7	14.2 9.6 13.7	3.3
	1967 年 10 月 : Oct., 1967											
A B A' B'	54.3 53.2 53.8 54.0	1.11 1.09 0.91 0.88	0.079 0.046 0.073 0.044	0.81 0.66 0.83 0.65	0.22 0.23	0.085 0.092 0.093 0.092	48.9 48.8 59.1 61.4	14.1 23.7 12.5 20.0	1.1	5.0 4.0	14.3 11.4	2.4 2.5
注:1964年	は各プロ	ットい	ずれも榼	搞 60 c	m 以上(a)および	59 cm J	以下(b)闷	2区分1	して針う	홡を採	取し

注:1964 年は各フロットいすれも樹高 60 cm 以上(a)および 59 cm 以下(b)に区分 して針葉 を採取した。各グループの同年の平均樹高成長は次のとおりであった。

A-a 30 cm, A-b 20 cm, B-a 33 cm, B-b 21 cm

A'-a 31 cm, A'-b 18 cm, B'-a 30 cm, B'-b 18 cm

Remarks: In 1964, the stands in each plot were grouped into two, one was over 60 cm in height(a) and another was below 59 cm in height(b). Their average height growth was as follows:

A-a 30 cm, A-b 20 cm, B-a 33 cm, B-b 21 cm

A'-a 31 cm, A'-b 18 cm, B'-a 30 cm, B'-b 18 cm

かしながら,いずれの養分濃度も同じプロット内の両グループ間の上述の差はきわめてわずかで,近似的 にはほぼ同一濃度と見なしてさしつかえない程度にすぎなかった。さらに,各養分濃度比も同様に各プロ ットの両グループ間には,とくに明りょうな相違は見られなかった。

各プロットを相互に比較すると、針葉の N 濃度は多少大きな相違を示していたが、 その他の各養分濃 度はかなり近似した値を示していた。 しかしながら、 針葉の N 濃度の相違はその年の各プロットの樹高 成長との間に関連性は見られなかった。

以上の結果は、土壌条件が同じ場合には針葉の各養分濃度に示される林木の栄養状態はほぼ同一で、成 長とは関連性が見られないことを示すものといえよう。このような場合に、個々の林木の成長量の相違 は、おそらく各個体の固有の因子によって支配されるものと考えられる。

-128-

(19-year-old) needles on BB soil (dry brown forest soil)													
Height (m)	С	N	Р	К	Ca	Mg	C/N	N/P	N/K	N/Ca	K/P	Ca/Mg	
$\frac{2.45}{2.00\sim3.00}$	56.7	1.09	0.11	0.70	0.32	0,080	52.0	9.9	1.6	3.4	6.4	4.0	
$\frac{1.55}{1.35 \sim 1.95}$	57.6	1.11	0.11	0.77	0.32	0.082	51.9	10.1	1.4	3.5	7.C	3.9	

第7表 BB型土壌におけるアカマツ (19年生) 針葉の組成 Table 7. Nutrient concentrations and their ratios of *Pinus densiflora* (19-year-old) needles on BB soil (dry brown forest soil)

備考 Remark: 針葉は11月初めに採取した。

The sampling period was the beginning of November.

この点に関連して、筆者らおよび丸山が、以前に広島県福山営林署管内の Bs 型土壌における 19年生の アカマツ林について行なった、葉分析の結果を第7表に示した。この場合も今回と同様に、樹高成長の良 効なグループと不良なグループに区分して、それぞれ葉分析を行なったが、針葉の各巻分濃度は両グルー プ間にほとんど相違が見られなかった。このような結果も、上述の見解を支持するものといえよう。

4-2-3. 針葉の養分濃度におよぼす施肥の影響

施肥試験開始後の結果については,第2年度(1966年)のプロットAの試料は,事故のために分析で きなかったので,同年度については十分な論議を行なうことがむずかしい。

各年度ごとに施肥区と無施肥区の各養分濃度を相互に比較すると、いずれの場合も、施肥区は無施肥区 よりも P および K 濃度一とくに P 濃度一のいちじるしい増大が認められた。 しかしながら、 N 濃度は 第1および第2年度は施肥区は無施肥区より低く、第3年度は両区の間に明りょうな相違が見られなかっ た。また、Ca および Mg 濃度は両区の間に明りょうな関係が認められなかった。

上述の針葉の N 濃度の変化は、おそらくいわゆる希釈作用によるものと考えられる。施肥にともなう 希釈作用については、塘⁵⁵⁾のアカマツ幼齢林、河田⁴²⁾のカラマツ幼齢林の N 濃度について示されている が、その他川名⁴⁷⁾のアカマツ幼齢林の場合に、施肥によって針葉の P および K 濃度は増大を示したが、 N 濃度が相違を示さなかったことも、同様に希釈作用によるものと考えられる。このように施肥にとも なう希釈作用は、N 濃度についてはいくつかの例が報告されているが、その他の養分濃度については明 らかにされていない。

一般に、林木に N, P₂O₅ および K₂O を単独ないし併用して施肥した場合に生ずる、材木の葉中の各養 分濃度の変化についてのいままでの諸研究者の結果は、すでに第2報⁴⁶⁾において詳述したので、今回は重 複をさけたい。

今回のクロマツの針葉中の P および K 濃度の施肥にともなう増大は,いままでの多くの結果と同様の 傾向を示していたといえよう。

施肥にともなう林木の葉中の N, P および K 濃度の増大は,一般に,同時に林木の成長量の増大をと もなう場合が多い。また,施肥した場合以外でも,成長量の異なる林分を相互に比較すると,成長量の大 きい林分ほど葉中の各養分濃度が大きい場合が多い。このような結果から,林木の葉の各葉分濃度と成長 との間に,直接の(一次的な)関連性があると考えられやすいが,筆者らは葉の各養分濃度は土壌中の各 養分レベルと直接の(一次的な)関連性を有し,成長とはむしろ間接の(二次的な)関連性を有するもの であろうという見解を第2報⁴⁶⁾において述べた。前述(4-2-2)の同じ土壌条件下における林木の成長が, 針葉の各養分濃度と関連性を示さなかったことは、このような見解によって容易に説明されよう。

これに対して,土壌条件の異なる林地,または施肥林と無施肥林を相互に比較する場合には,各林地の 土壌中の各養分レベルの相違は,林木の栄養状態の相違をもたらし,したがって,葉の各養分濃度に反映 してその相違をもたらすが,同時に林木の成長の相違をもたらす主要な原因を構成している場合が少なく ない。このような場合には,毎木ないし標準木(平均木)によって代表される各林分の成長と,林木の葉 の各養分濃度によって示される栄養状態が,相互に密接な関連性を示す場合が多いことは当然といえよ う。

上述のように,施肥区における針葉の N 濃度は 一おそらく希釈作用が原因と考えられるが一 無施肥区 に比べて増大を示さなかったが, P および K 濃度が各年度いずれも増大を示したことは,施肥によって 土壌中の P および K レベルが増大したことを示すものといえよう。

4-2-4. 針葉の養分比

針葉の各養分比については,次のような結果が得られた。

施肥区は無施肥区と比べると、各年度いずれも N/P, N/K および K/P 比一とくに N/P 比一のけんち ょな減少が認められたが、 N/Ca および Ca/Mg 比は一定の傾向が認められなかった。また、 C/N 比は 第1~2年度は施肥区は無施肥区より大きかったが、第3年度は明りょうな相違が認められなかった。こ れらの結果は、上述の施肥にともなう各養分濃度の変化を反映しているといえよう。

筆者らは、林木の葉の養分比は直接(一次的)には土壌中の各養分レベルの相互の比率を示すものであって、間接(二次的)に成長と関連性を有するであろうという見解を第2報⁴⁶⁾において述べた。このような見解にしたがうと、上述のこの試験地における養分比の変化は、この試験地の土壌は相対的に、Nレベルに比べるとPおよびKレベルーとくにPレベルがいちじるしく低く、また、Kレベルに比べるとPレベルが低かったが、施肥によってこれらの点が改善されたことを示すものといえよう。

5. おわりに

1) この報文は広島県西条営林署管内姥ヶ原国有林の, Ba-Er 型土壌における2年生のクロマツ幼齢 林に対する施肥試験の3か年間の経過を報告したものである。

2) 試験は施肥区(住友森林化成1号, 15-8-8, 1本あたり100g, 3年連続施肥) および無施肥の2 種類とし,それぞれ2回くり返しを行なった。

3) クロマツに対する肥効は次のとおりであった。

i) 初年度は樹高成長より直径成長の方が大きかったが、第2~3年度は樹高成長の方が大きかった。

ii) 施肥区は無施肥区に比べると、3か年間に樹高成長で84cm(168%)、直径成長で26mm(144%)の増大を示した。

4) 設定時および以後の3か年間の葉分析の結果は次のとおりであった。

i) 設定時に各プロットごとに, 平均樹高以上と以下の2つのグループに分けて葉分析を行なった。 両グループは樹高および同年度の樹高成長にかなりの相違が見られたにもかかわらず, 針葉の各養分濃度 および養分比はほとんど相違が見られなかった。

ii) 施肥後は, N 濃度は第1~2年度は施肥区は無施肥区より減少を示したが, この点はおそらく希 釈作用によるものと思われた。第3年度は両者の間に明りょうな相違が見られなかった。

-130 -

広島県姥ケ原国有林におけるクロマツ幼齢林施肥試験(河田・衣笠) - 131-

iii) 各年度とも P および K 濃度-とくに P 濃度-は, 施肥区は無施肥区より 明りょうに増大を示したが, Ca および Mg 濃度は施肥との間に一定の関連性が見られなかった。

5) 養分比については,各年度いずれも施肥区は無施肥区に比べると,N/P,N/K および K/P 比一と くに N/P 比の減少がけんちょであった。

稿を終わるにあたって,終始多大のご配慮をいただいた元関西支場長徳本孝彦技官,現同支場長江畑奈 良男技官,同育林部長松下規矩技官および試験地の設定,管理および保育等に多大のご協力をいただいた 西条営林署の関係各位に心からの感謝を捧げたい。

文 献

(府県林地肥培試験報告:府県別にアルファベット順)

1) 岩間義男·鳥居和之:林地肥培試験,愛知県林試業報, pp. 42~~58, (1964)

2) 榎本善夫:林地肥培試験,千葉県林試業報, pp. 24~31, (1958)

- 3) 渡辺秀彦:アカマツに対する施肥時期別肥効試験,愛媛県林指業報(昭35~37), pp. 73~74
- 4) 清水 敬:同上,同上(昭38), pp. 75~76;同上(昭39), pp. 62~64
- 5) 渡辺秀彦・得井 修:アカマツに対する肥料の種類別肥効試験,同上(昭35~37), pp. 69~72
- 6) 加藤義雄・石川 務:林地肥培試験,福井県林試報,1, pp. 37~39, (1963);2, pp. 137~152, (1964);3, pp. 85~97, (1966)
- 7) 安井洋二·安藤重男:同上,同上,4, pp. 54~56,(1967)
- 8) 安井洋二:同上,同上,5, pp. 69~82, (1968)
- 9) 平川 昇・星 稔男:幼齢林の林地肥培試験,福島県林試報,11, pp. 47~56, (1967)
- 10) 岸 善一·田中悦郎:林地肥培試験,広島県林試報(昭32), pp. 95~101
- 11) 桑原武男:同上,同上(昭34), pp. 69~79;同上(昭35), pp. 31~48;同上(昭36); pp. 58~ 64;同上(昭38), pp. 43~47
- 12) 兵庫県林業試験場:林地肥培試験,兵庫県林試業報(昭32), pp. 45~55;同上(昭33), pp. 28~34;同上(昭34), pp. 39~51;同上(昭35), pp. 51~60;同上(昭36), pp. 40~48
- 13) 段林弘一・上山泰代:アカマツ5年生の施肥試験,同上(昭40), pp. 187~188;同上(昭41), pp. 191~192
- 14) 中野敵夫 北中外弘:林地肥培試験,石川県林試報,1,pp. 131~138,(1963);4,pp. 108~113,(1966)
- 15) 北中外弘·島木正則·中野敵夫:同上,同上,2, pp. 138~145, (1964)
- 16) 北中外弘·中野敝夫·島木正則:同上,同上,3, pp. 155~160, (1965)
- 17) 石原研治:海岸砂防地造林の施肥について, 鹿児島林試報, 11, pp. 37~40, (1963)
- 18) 山内孝平:特殊土じょう地帯の林地肥培試験,同上,14, pp. 57~64, (1966)
- 19) 小野允也・上本勝司:林地肥培試験,三重県林業センター業報,1, pp. 2~26, (1964)
- 20) 小野允也:同上,同上,2, pp. 3~23, (1965);3, pp. 10~37, (1966)
- 21) 鈴木張平:同上,同上,4, pp. 43~66, (1967)
- 22) 宮城県農業試験場:宮城県農試,林業に関する試験成績書(昭34), pp. 90~104;同上(昭35), pp. 47~62;同上(昭36), pp. 30~43;同上(昭37), pp. 30~34
- 23) 及川安寿·飯田達雄:林地肥培試験,大分県林試報(昭35), pp. 103~109
- 24) 及川安寿·飯田達雄·日隈正己·金田文男:同上,同上(昭38), pp. 39~60
- 25) 日隈正己·飯田達雄:同上,同上(昭39), pp. 52~70
- 26) 奥貫春夫:林地肥培試験,埼玉県林試業報(昭33), pp. 15~18;同上(昭36), pp. 37~42;同上

(昭37), pp. 38~40; 同上(昭38), pp. 35~37; 同上(昭39), pp. 18~20; 同上(昭40), pp. 26~29 27) 静岡県林業試験場:林地肥培試験,静岡県林試業報(昭33), pp. 80~82; 同上(昭34), pp. 121~

- 129;同上(昭35),pp. 153~157;同上(昭36),pp. 137~142
- 28) 伊藤守夫:同上,同上(昭37), pp. 147~151;同上(昭38), pp. 161~163;同上(昭39), pp. 143 ~149;同上(昭40), pp. 109~119;同上(昭41), pp. 111~120
- 29) 谷沢恒夫:林地肥培試験,栃木県林業 センター業報,1, pp. 19~20,(1964);2, pp. 40~41,(1965)
- 30) 木村 繁:同上,同上,3, pp. 32~36,(1966)
- 31) 吉次信策:鳥取県の林地肥培の現状とその効果 に つ い て, 鳥取県林試資料 No. 11, pp. 1~32, (1964)
- 32) 同上:林地肥培試驗,鳥取県林試報,4,pp.49~50,(1960);9,pp.14~21,(1966)
- 33) 中崎哲二・西本哲明:クロマツ幼齢木に対する施肥位置のちがいが肥効におよぼす影響について、 山口県林試業報(昭38), pp. 43
- 34) 西本哲明:クロマツ幼齢木施肥位置試験,同上(昭40),pp. 5~6;同上(昭41),pp. 21~22(府県肥培事例調査)
- 35) 愛媛県林業試験場:林地肥培効果測定報告書(昭37),愛媛県林試資料
- 36) 桑原武男:林地肥培効果測定調查,広島県林試報(昭37), pp. 37~49
- 37) 山内幸平・内 邦博・牧之内文夫:マツの林地肥培効果測定調査, 鹿児島県林試報, 11, pp. 42~ 85, (1963)
- 38) 中崎哲二·西本哲明:林地肥培効果測定調查,山口県林試業報(昭37), pp. 92~118
 - (その他)
- 39) 深作哲太郎・伊藤忠夫・林 公彦・照山竜男:林齢を異にしたアカマツ天然生林に対する肥培試験, 森林と肥培,18, pp. 2~6,(1961)
- 40) 橋本与良: 瘠悪荒廃林地とその改良, 全国瘠悪林地改良協会, (1961)
- 41) 伊藤忠夫:アカマツ幼齢林の肥培,森林と肥培,44, pp. 3~5, (1966)
- 河田 弘 (Kawaba, H.):湿性ポドゾルにおけるカラマツ幼齢林の施肥試験 —カラマツの成長および針葉の組成におよぼす施肥の影響,林試研報 (Bull. Govern. Forest Exp. Stat.), 162, pp. 143~ 162, (1964)
- 43) 同上(Ibid.): アカマツ 1-1 苗の時期別養分吸収について,同上(Ibid.), 187, pp. 27~52, (1966)
- 44) 同上 (Ibid.): アカマツ 1-1 苗の成長および養分組成におよぼす窒素、リン酸およびカリの施用量の 影響、同上 (Ibid.)、212、pp. 59~88、(1968)
- 45) 河田 弘・衣笠忠司 (Kawada, H. and Kinugasa, T.): 高野山国有林におけるスギ・ヒノキ幼齢林 施肥試験 (関西地方における林地施肥試験 (第1報)), 同上 (Ibid.), 191, pp. 115~136, (1966)
- 46) 同上 (Ibid.): 兵庫県マンガ谷国有林における スギ幼齢林施肥試験 (同, 第2報), 同上 (Ibid.), 216, pp. 75~97, (1968)
- 47) 川名 明:堤列海岸平野の低地過湿林の改良に関する研究,農林出版社,(1966)
- 48) 北原完治・小池房男:クロマツ人工造林地の肥効について、アカマツに関する研究論文集(林学会, 日林協,大阪営林局), pp. 17~30,(1954)
- 49) 守屋重政: 苗木に対する肥料三要素試験,林試研報, 22, pp. 71~85, (1922)
- 50) 佐藤 俊・山谷孝一・長谷川浩一・後藤和秋・西田豊昭・柳谷清子:東北地方における主要造林樹 種の幼齢時における施肥効果について;同上,167, pp. 93~190,(1964)
- 51) 佐藤 亨・及川恵司・宮崎 榊:アカマツ天然更新の方法と施肥の効果について,同上,147, pp. 1~43,(1962)
- 52) 沢田秀邦・村本正昭・奥野 志・深田 利・古田好生:林野土壤調査報告書, 大阪 営林局土壌調査

-132-

-133-

報告8号,西条事業区,(1963)

- 53) 芝本武夫:スギ,ヒノキ,アカマツの栄養ならびに森林土壌に関する研究, pp. 1~253, 林野庁, (1952)
- 54) 柴田信男:アカマツ林の肥培に関する2・3の実験的考察,アカマツに関する研究論文集(林学会, 日林協,大阪営林局), pp. 1~16,(1954)
- 55) 塘 隆男 (Tsutsum, T.):わが国の主要造林樹種の栄養および施肥に関する基礎的研究,林試研報 (Bull. Govern. Forest Exp. Stat.), 137, pp. 1~158, (1962)
- 56) 和田克之:林地肥培試験, 2~3の事例と考察,森林と肥培, 47, pp. 1~5, (1967)

A Study on Fertilization of Young *Pinus Thunbergii* Forest in Ubagahara National Forest in Hiroshima Prefecture (Studies on Forest Fertilization in Kansai Area Part 3)

Hiroshi Kawada and Tadashi Kinugasa

(Résumé)

1. Introduction

The woodland in the district along Seto Inland Sea coast is comprised of bare hills and poorly growing *Pinus densiflora* forest naturally regenerated. In recent years, *P. densiflora* or *P. Thunbergii* seedlings were often planted on felled areas of pine forests. Their superior growth would be unexpectable as the growth of former forest was very poor.

The authors arranged to carry out a fertilizer trial upon young pine forests with the object of increasing their growth and to conduct an examination of annual changes of nutrient concentrations and their ratios of needles in the same way as in the previous parts of these studies⁴⁵⁾⁴⁶⁾ to get the basic information on the nutrient physiology of pines.

This paper deals with an intermediate result covering three years after the fertilizer trials on a young *P. Thunbergii* forest.

2. Test forest and method

2-1. Test forest

The test forest was a 2-year-old *P. Thunbergii* forest (planted in the spring, 1963) in Ubagahara National Forest in Hiroshima Prefecture.

It locates on a short mountain slope from its middle to near the top.

Its site conditions were as follows:

Height above sea level······250 m, Direction······S25°E, Inclination······20~22°, Parent material of soil······Granite, Annual average temperature·····15.3°C, Annual precipitation·····1,350 mm.

Four plots, A, B, A' and B', in two blocks, were settled on a 2-year-old P. Thunbergii forest in the beginning of December, 1964.

2-2. Fertilization

Plot A and A' were fertilized and Plot B and B' unfertilized. At the beginning of this trial, 100 g of mixed fertilizer (N...15%, $P_{9}O_{5}...8\%$, $K_{2}O...8\%$) per one stand was given. The same amount of fertilizer was given additionally in late October, 1965 and 1966, the successive years.

林業試験場研究報告 第219号

-134 -

2-3. Analytical method

The analytical methods of the soil and needles were all the same as those described in Part 1 and 2 of these studies $\frac{45}{46}$.

3. Soil

Two profiles were examined in this test forest. Profile 1 represented the Block 1 (Plot A and B) and Prof. 2 the Block 2 (Plot A' and B'). Their textures, physical and chemical properties were shown in Table $1\sim3$ and Fig. 1.

The types of soil of both profiles was BA-Er soil (the intermediate type between dry brown forest soil and eroded soil). The development of their A horizons was very poor and their thickness was only $2\sim3$ cm. Their textures were clayey. Their physical properties were inferior as evidenced by their little water percolation rates, large volume weights and poor porosities. On the chemical properties, their low humus cotent, high C-N ratios, low exchangeable Ca and Mg contents and 0.2 N HCl soluble P₂O₅ contents of A horizons were not favourable for the growth of stands.

4. The growth of *P. Thunbergii* and the fertilizer efficiencies

The growing processes of stands during the three years after initial fertilization were shown in Table 4 and 5, and Fig. 2.

The growth of stands in unfertilized plots was very poor. Their average height at the 5-year-old stage reached only 101 and 113 cm. These results were presupposed before the beginning of this trial by comparative field observations on the growth of neighbouring pine forests. The increments of height and basal diameter of stands of fertilized plots as compared with those of unfertilized plots during the three years after initial fertilization were distinguished. The average height at the 5-year-old stage reached 188 and 193 cm. During the three years after initial fertilization, the growth increments of fertilized plots reached 84 cm (168%) in height and 26 mm (144%) in basal diameter as compared with those of unfertilized plots.

The fertilizer efficiencies were satisfactory to the authors. The growth of stands in fertilized plots during the three years was nearly all the same as, or more than the most excellent growth level of young pines in this district. However, it was not superior comparatively to the growth level of young pines on good soil conditions in normal woodlands.

Summaries of previous results of fertilizer trials upon young pine forests in this country, have made reference in a few reports to the very poor or nearly ineffective fertilizer efficiencies on young pine forests. Even in the cases in which fertilizer efficiencies were recognized to some extent, they were less in comparison with those on other main conifers, *C. japonica*, *C. obtusa* and *L. leptolepis* in most cases.

One of the authors⁴⁴⁾ and others pointed out that the sensitivity of the growth of P. densiflora seedling to the nutrient level of soil was lower as compared with the other main conifers. It was supposed that its aged stands would be nearly all the same, too. The abovementioned low fertilizer efficiency of young pine forests would be explained by their nutritional character.

5. The nutrient concentrations, their ratios of needles and changes by fertilization

The annual nutrient concentrations and their ratios of needles of the uppermost shoots of stands were shown in Table 6.

The authors made the following investigation at the beginning of this trial in December,

広島県姥ケ原国有林におけるクロマツ幼齢林施肥試験(河田・衣笠)

-135 -

1964 to examine the relationship between the growth of stand and the nutrient concentrations of needles. The stands in each plot were divided into two groups, one in which their height was more than 60 cm, near the average height of each plot, and another in which their height was less than 59 cm. Their needles were picked up and analysed separately. The annual height growth of the former group was more excellent as compared with the latter group. The differences of nutrient concentrations of needles between both groups in each plot were very slight; in fact they may be regarded approximately all the same. Furthermore, no clear differences were observed on the nutrient ratios between both groups in each plot. These facts showed that the nutrient condition of forest stands on the same soil conditions were nearly all the same and they had no clear correlation to their growth. In these cases, the differences of growth among the stands would be induced by factors other than the nutritonal conditions — probably their own internal factors.

After the fertilizer trials were begun, the following results were obtained. Unfortunately, the needles of Plot A in the second year (1966) were lost accidentally before analysis, causing the authors inconveniences in discussing the results of that year. The P and K—especially P—concentrations of fertilized plots increased remarkably in comparison with those of the unfertilized plots in the years examined. The N concentrations of needles of fertilized plots were lower as compared with the unfertilized plots in the first and second years (1965 and 1966). But they showed no clear differences in the third year (1967). The Ca and Mg concentrations of needles showed no clear correlation to the fertilization in all years examined.

The decreases of N concentration of needles attending the fertilization in the first and second years would be induced by the so-called dilution effect. The dilution effect attending the fertilization was observed on the N concentration by one of the authors⁴²⁾ on the young *Larix leptolepis* forest and by $T_{SUTSUMI}^{55)}$ on the young *P. densiflora* forest. But it was not observed on other nutrient elements.

The nutrient concentration increments of leaves of forest stands attending the fertilization were pointed out by many authors. The previous results of research on these problems in our country and countries abroad reported similar results as had been described in Part 2 in these studies⁴⁶). The increments of P and K concentrations of needles by fertilization in this test forest agreed well with the previous results.

The increments of nutrient (N, P and K) concentrations of leaves of forest stands by fertilization usually attended their growth increments. Comparing the nutrient concentrations of leaves of stands on certain forests (unfertilized) in which their growth was widely different, it increased in proportion to the growth increments of stands in most cases. The incorrect opinion that the nutrient concentrations of leaves of stands, i. e. their nutrient conditions shown by them, related directly to their growth was apt to be accepted from these results. However, the authors were of the opinion on these problems that the nutrient concentrations of needles related directly (primary relation) to the nutrient levels of forest soil and, accordingly, they related indirectly (secondary relation) to the growth of stands. The authors expressed the same opinion in Part 2 of these studies⁴⁶⁾ to explain the fact that the nutrient concentrations of needles of stands were not in proportion to their growth 33 compared with their annual changes on the same young forests.

The above-mentioned facts that the nutrient concentrations of needles were nearly all the same in both groups on the same plots in which growth was clearly different, in Dec., 1964,

would be easily explainable by the opinion given above.

Furthermore, our previous unpublished data on the nutrient concentrations of needles of 19-year-old *P. densiflora* forest on B_B soil showed a similar tendency and supported the said opinion, too. As shown in Table 7, the nutrient concentrations and their ratios of both groups, the excellent growth group and the inferior growth group, were nearly all the same.

Comparing these relations with the forests in which the soil conditions and growth of stands were remarkably different, the differences of nutrient levels of soil induced the differences of nutrient concentrations of leaves of stands and, at the same time, they would be one of the most effective factors influencing the growth of stands in most cases. Consequently it would be naturally applicable that the growth of forest stands was in proportion to their nutrient conditions.

The aforesaid increments of P and K concentrations of needles attending the fertilization in this test forest would be induced by the increments of P and K levels of soil.

On the nutrient ratios of leaves of stands, the authors expressed the opinion in Part 2 of these studies⁴⁶⁾ that they related directly (primary relation) to the ratios of nutrient levels of soil and, accordingly, they related indirectly (secondary relation) to the growth of stands.

On the annual nutrient ratios of this test forest, the decreses of N/P, N/K and K/P — especially N/P—ratios in the fertilized plots were distinguished in comparison with those of unfertilized plots. However, the N/Ca and Ca/Mg ratios showed no clear relation with fertilization. These facts suggest that the ratios of P and K—especially P—levels of soil to N level were low, and those of P level to K level were somewhat low. The P and K levels of soil would be increased by fertilization.

6. Acknowlegement

The authors wish to express their gratitude to Mr. T. TOKUMOTO, former Director of Kansai Branch of this Experiment Station, Mr. N. EBATA, Director of Kansai Branch, and Mr. K. MATSUSHITA, Chief of Silviculture Division of this Branch for their encouragement in carrying out this work.

-136 -